

『ふくろふ』諸本の成立について

——静嘉堂文庫本を中心に——

荒木希美

○ はじめに

本稿で取り扱う室町時代物語『ふくろふ』は、仮名草子『あだ物語』や『薄雪物語』、『恨の介』との影響関係及び同時代あるいはそれ以前の成立の室町時代物語『車僧』『浄瑠璃物語』との影響関係が先行研究で指摘されている⁽¹⁾。つまり、『ふくろふ』は室町時代物語から仮名草子への過渡期の作品であるといえる。一方で、本文の異なる伝本が複数現存しているが、それら本文の成立順序については未だ定説が立てられていない。そこで、本稿ではその伝本の成立順及び成立の新しい伝本に見られる改作の意図を考察することで、江戸時代における室町時代物語の改作状況の一端を明らかにすることを目的とする。

一 諸本整理

一― 諸本の系統

はじめに、本稿作成にあたって翻刻又は影印を参照できた『ふくろふ』伝本を以下に列挙する⁽²⁾。○内は題簽又は外題、内題等の伝本につけられた作品名を、◇内は以下本稿で用いる

略称を示す⁽³⁾。

- ① 松本隆信氏蔵・奈良絵本（「ふくろふ」）
〈松本本〉
- ② 國學院大学図書館蔵・奈良絵本（「ふくろふ」）
〈國學院本〉
- ③ 京都大学附属図書館蔵・絵入刊本（「ふくらう」）
〈京大本〉
- ④ 静嘉堂文庫蔵・絵入写本（「うそひめ物かたり」）
〈静嘉堂本〉
- ⑤ 国会図書館蔵・写本（「うそ姫物かたり」）
〈国会図書館本〉⁽⁴⁾
- ⑥ 刈谷市中央図書館蔵・「蓬蘆雜抄」所収写本（「鳥物語」）
〈刈谷本〉
- ⑦ 東京大学国文研究室蔵・写本（「ふくろふのさうし」）
〈東大本〉
- ⑧ 天理大学附属図書館蔵・「落窪物語抄」所収写本
（「ふくろふのさうし」）
〈天理本〉

ただし、天理本については、後述の梗概に述べる内容とほとんど一致せず⁽⁵⁾、また他の七本に共通する表現も見られない⁽⁶⁾。ため本稿では別本扱いとして取り扱わない⁽⁷⁾。したがって、計七本の伝本を以下考察の対象とする。

以下松本本を元に梗概を示す。

加賀国亀割坂に住む老翁ふくろは、うそひめを一目見るなり恋に落ちる。鳥と鶯に相談した結果、ふくろは山雀に仲介役を依頼し、山雀はふくろの恋文をうそひめに渡す。しかし返事は来ず、焦ったふくろはうそひめからの色よい返事を求めて薬師に祈願する。一方、初めはふくろからの恋文を山雀に投げ返したうそひめであったが、山雀の説得により、ふくろに返事を書く。返事をうけとつ

たふくろは歓喜するも、返事の内容が理解できず途方に暮れる。そのふくろの夢に、うそひめとの恋愛成就を祈願した薬師が現れ、謎解きが行われた結果、ようやくうそひめとの逢瀬が成就することとなった。ところがこのことが知れ渡ると、諸鳥もうそひめに和歌を送り、長年うそひめに懸想し続けていた鶯は激怒し、ふくろとうそひめに討手を送る。その結果うそひめは亡くなり、悲嘆にくれるふくろはうそひめの魂を呼び出す神おろしを行った後、

表一 『ふくろふ』各系統場面構成対照表

	A系統第一類、松本本・國學院本・京大本 (刈谷本・国会図書館本)	A系統第二類、静嘉堂本	
(2)	上見ぬ御方、恋文を無視され激怒	B系統、東大本	(1) うそひめ管弦、諸鳥の恋

出家し、うそひめの菩提を弔うのであった。

以上の梗概は凡そどの伝本にも共通する内容ではあるが、場面構成が前後する部分がある他、ふくろの相談相手の鳥が異なるなどの違いが見られる。これまでの研究^①においては、伝本を系統で分けることなく伝本本文の成立順が論じられてきたが、本稿では伝本の相違を比較・整理することで以下の通り二系統三種類に分類する。

- A (一) 松本本、國學院本、京大本、刈谷本、国会図書館本
- (二) 静嘉堂本
- B 東大本

系統立ては以下の表の通り、各伝本の場面構成を対照することにより行った。なお、表内の数字はその伝本における時系列の順番を表す。また各系統の独自部分に二重傍線を付し、さらに伝本毎に相違が見られる部分を□で囲んだ。

⑩	うそひめの返事	⑨	うそひめの返事
⑩	御山の薬師による夢告	⑩	うそひめの返事
⑪	うそひめとの逢瀬(和歌二首)	⑪	うそひめとの逢瀬(和歌二首)
⑫	後朝の別れ(和歌二首)	⑫	後朝の別れ(和歌二首)
⑬	諸鳥の和歌(九首)	⑬	諸鳥の和歌(八首)
⑭	上見ぬ驚による討手 ↓誤ってうそひめ殺害	⑭	上見ぬ驚による追っ手 ↓うそひめ行方不明
		⑮	うそひめを探して諸国遍歴
		⑯	うそひめ病死
⑮	悲嘆のあまり自害を試みる ↓木菟のきすけの説得	⑱	悲嘆のあまり自害を試みる ↓夜鷹の与七の説得
		⑲	うそひめの辞世の歌(一首) ↓うそひめの菩提を弔う
⑯	神おろし	⑳	神おろし
		(19)	神おろし
		(18)	うそひめの亡骸を見て悲嘆にくれる
		(17)	上見ぬ驚、討手を派遣して うそひめを殺害
		※↓(3)	
		(16)	後朝の別れ(和歌六首・小歌二首)
		(15)	うそひめとの逢瀬
		(14)	米山薬師の夢告
		(13)	うそひめの返事

①7 高野山で出家、諸国遍歴して
菩提を弔う

②1 高野山で修行、大往生
辞世の歌（一首）

以上の表より、最も固有の場面が少なく、『ふくろふ』における基本的な話形であると考えられる五本をA系統第一類とした。ただし、次節に述べるように刈谷本及び国会図書館本は異同が多く、一部場面を欠く。また、従来は第一類と同列に論じられていた静嘉堂本には、この基本の話形に加えて、ふくろうがうそひめを探して諸国遍歴する場面(⑩)や、二鳥の辞世の和歌(⑪・⑫)が見られることから、静嘉堂本はA系統第二類とする。ただし、第一類・第二類が共に内容の一致する場面においてはその本文の大部分が共通していることから、系統は大きくA系統と一つにした。一方、B系統東大本はA系統伝本と共通する表現も確かに見られるものの、その表現の順序の入れ替わりが甚だしく、またA系統と共通する場面においても異なる本文を有することの方が多い。加えて、A系統第一類・第二類ほど内容の一致性が見られない。その他にも、諸鳥の和歌を圧倒的に多く含み、さらに中国の故事を引用するなど独自部分が多く、A系統よりも分量がかなり多くなっていることから別系統であると言えよう。

一 一 一 A系統第一類

先行研究では静嘉堂本が古態と考えられていることが多いが、『ふくろう』解題(註)で「少なくとも現存する静嘉堂本が版

本(稿者注…京大本)に後れて作られたことは明らか」であり、「本文についても版本から静嘉堂本へという関係を考えたい」と述べられているように、静嘉堂本が古態に近いと断言することは難しい。そこで、本節ではどの系統の本文が最も古態に近いかを論ずる手がかりとして、まずA系統第一類の諸本内での成立順について考察する。

第一類に属する伝本の内、成立が遅いと思われるのが刈谷本と国会図書館本の二本である。この二本を扱った先行研究はほとんどないが、それぞれの奥書が明治十四(一八八二)年、元文元(一七三六)年となっており、少なくともこれら二本の書写年代が他の伝本よりも遅いことは明らかである。また、刈谷本は異文及び脱文が多く、他本との比較は難しい上に、文章が不自然で意味の通らない箇所が多い。国会図書館本も同様に異文や脱文が所々に見受けられる。さらに、後半の神おろしの場面(⑩)の欠如と末尾(⑪)の簡略化が見られる他、諸鳥の和歌が物語本文の後ろに別に抜き出して書かれているなどの他本にはない特徴をもっており、刈谷本同様、国会図書館本の成立は他本よりも遅いと考えられる。

次に、國學院本と京大本について考察する。二本は本文のほとんどが一致している。一方で、京大本との異同箇所については松本本と一致している部分もあり、三本の関係性は複雑であるが、國學院本と京大本の本文の一致度から、両者が親子関係

あるいは兄弟関係にある可能性は高い。なお、京大本は『ふくろう』伝本中で唯一の刊本であり、最も流布した伝本である可能性が高いことに留意しておく必要がある。

最後に、松本本について述べる。松本本の本文は前述の二本と概ね一致しているが、國學院本と京大本の一致具合と比べると、やや独自文が多くなっている。この独自文を手がかりに、以下國學院本及び京大本の成立順について考察する。まず、先行研究^{〔七三〕}にすでに指摘されたものを含め、京大本に誤脱がある、あるいは松本本の方が文意が通じやすいと思われる五箇所について確認する。(傍線部は松本本以外のA系統伝本には見られない語句であることを示す。二重傍線部は松本本のみ本文が異なっている箇所である。)

- ①うそひめのことひき給ひし御すかたを一め見しより此かた、しつちなきこひとなりて
- ②とうほうさくか九千さい、うつゝらか八まんさい、りうちくわしやうか一千さい、うらしまか七百さいもかきりあるよし
- ③ちこく、かき、ちくしやう、しゆら、にんけん、てんしやうの六たうをあるかんととき
- ④かはおもなまきうきくさの、こけのたもともくちぬへし、ふてにもいかてつきすまし、さすかことをもいはしるの、まつことのは(他本…ことほり)もかれ／＼になりゆくそでもしらくもの
- ⑤かのやくしの御ほうてんを、きんきんをちりはめ、しやくのたるき、めなうのゆきけた、はりのはしら、にしきのと

ちやう、すいしやうのきりいし、きん／＼のいさをしき、

始めに松本本の方が文意が通じやすいと思われる用例を検証する。用例①は、明らかに傍線部の言葉がなければ文意が通じにくく、傍線部のない方が不自然である。用例④については、読解の上では省略されていても特に支障のない語句である。ただし、異同のある「ことのは」については、他本の「ことほり」という語句では後の「かれ／＼」に続かないという点では、松本本文の方が自然である。

次に、京大本に誤脱があると思われる用例であるが、用例③は仏教の六道を列挙した箇所であり、天上界のみが欠けているのは不自然である。したがって、天上界を含んでいる方が、元々の表現であった可能性が高い。用例②⑤は物尽くしの文の一部である。用例②については、『まんぢう』に「とうぼうさくが九千さい、うつゝらの八万さいも名のみばかりぞのこりける」^{〔七三〕}、謡曲『磯崎』に「鬱頭藍が、八万歳昔はありて今はなし。東方朔が九千歳も、名をのみ聞きて目には見ず」^{〔七四〕}とある。また、用例⑤についても謡曲『鶴亀』に「碑礫の行桁瑠璫の橋」^{〔七五〕}という表現が見られるなど、両者共に他の室町時代物語や幸若舞曲、謡曲に同様の表現が見られ、ある程度定型化された表現であることが分かる。よって、用例③同様に、用例②⑤についても、松本本文の方が本来の表現に近い文章であると見えよう。以上より、松本本がA系統第一類の中では最も古態に近い本文である可能性が高いと考えられる。

本章ではA系統第一類と第二類の成立順を考えるための手がかりとして、A系統第二類静嘉堂本の大きな特徴である道行文^⑬について考察する。この道行文は、ふくろうが行方不明となつたうそひめを探す旅路を描き、静嘉堂本文全体のおよそ七分の一を占める。さらに注目されるのは、室町時代物語『朝顔の露』における道行文の前半部分とそのほとんどが一致することである。以下にそれぞれの道行文の冒頭部分を示す¹⁵⁵。

静嘉堂本

やふれころもすみにそめ、
せうこをくひにうちかけて、
南無阿弥陀佛みたによらい、
ねかはくはうそひめの御ゆく
衛しらせ給へとゑかうして、
せたのはしにそかゝりける。
のし、しの原をすきゆけは、
なみたにくもるかゝみ山、そ
れよりいせ路にをもむき、す
ゝかの山にさしかゝり、これ
なんいにしへみやすとこる此
國へ下り給ふとき、源氏の大
将名残の哥に

ふりすてゝ今日はゆくと

『朝顔の露』(下巻)

かくてそのよもあけぬれば、
せたのからはしうちわたり、
のし、しのはらをすきゆけ
は、なみたにくもるかかみ
山、それよりいせちにおも
むき、すゝかの山にさしか
ゝり、これなんいにしへみ
やす所、このくにへくたり
給ひしとき、けんしの大し
やうのなこりのうたに

ふりすてゝけふはゆくと

も鈴河かわやせせのなみ
に袖はぬれしや
とよみをくり給へは、みや
す所御返哥に
すゝか川やせせのなみに
ぬれ／＼ていせまてたれ
かをもひをこさん

もすゝかかはやせせのな
みにそてはぬれしや
とよみをくり給へは、みや
す所御返か
すゝかゝはやせせのなみ
にぬれ／＼ていせまてた
れかおもひをこさん

(後略)

(後略)

以上の冒頭部分だけを見ても、文末表現などの細かな異同は見られるものの、二作品の道行文が一致していることは窺われよう¹⁵⁶。最も大きな異同でも、中盤の「たゝいたつらに、みつの月をのそめる、さるのこづくにて、ひきとゝむへきたよりもなく、たゝはうせんとあきればて」(『朝顔の露』)において、傍線部分の欠落が静嘉堂本に見られる程度であり、両者に影響関係があることは明らかである。短い文章を表現の特徴や語調を変えずに長くするよりも、長い文章の一部分を利用する方が簡単で自然な行為であるため、『朝顔の露』の道行文を静嘉堂本は引用していると考えられるが、その仮説をなお確かなものとするため、以下どちらの道行文が先に成立したのかについてさらに検証を加えたい。

二一 『朝顔の露』基本事項及び現存伝本

まず、前提条件として『朝顔の露』が静嘉堂本よりも先に成

立している必要がある。以下『朝顔の露』について基本事項を確認する。

『朝顔の露』は『ふくろふ』と同じく異類小説に属する作品で、露の宮と朝顔の上との恋を描いた恋愛物^{〔下〕}である。その他に、継子苛めの要素や、最終的に登場人物全てが自身の名の通りの植物に変じるといふ本地物のような工夫が見られる。最も古い伝本は「此一巻者宗祇法師之真筆無疑也」一覽次記之畢正保二年二月日 八十歳 玄陳」の識語をもつ絵入写本である。識語は玄陳の真筆であるとされ、本文も宗祇の真筆であるかは定かではないが、室町時代中頃の成立であろうとされる^{〔下七〕}。ただし、伝本の多くは刊本であり^{〔下七〕}、重版も行われていることから、刊本により世間に広まったと考えられる。最古写本と最も早い刊本である寛永頃の絵入刊本の本文はほとんど異同がなく、また重版後も一部簡略になる部分はあるが、物語の内容に変化は見られない。このことから、『朝顔の露』は成立当初から完成された物語であったであろうことが推察される。道行文においてはどの伝本も仮名遣いや漢字の使用箇所以外の異同はない。

なお、静嘉堂本の書写年代は奥書によると慶安三元（二六四八）年である。したがって、少なくとも現存伝本の成立は『朝顔の露』刊本よりも遅く、静嘉堂本本文の作者が『朝顔の露』刊本を参照したとすることに矛盾は生じない。

二二二 道行文中の一表現について

本節では、両作品に共通する道行文中の表現に着目して前後

関係を考察する。『朝顔の露』における道行文は、継母により追い出され、吉野山に捨てられた朝顔の上を露の宮が諸国遍歴して探す、その旅路を描いている。その内の以下の傍線部の表現をとりあげる。

∴しはしうきねのまほろしに、君のすかたのたちそひて、
ゆめまくらつゝみしか、よのはやあけぬれば、あさかほの
ありしおもかけはきへうせて、たゝいたつらにみつの月を
のそめる、さるのことくにて∴

傍線部冒頭にある「朝顔の面影」という表現はこれまでの物語作品には見られず、珍しい表現である。「朝顔」という言葉自体は植物としての名称以外に、共寝をした後の寝起きの顔という意味で物語ではしばしば用いられる。しかし、『ふくろふ』ではふくろろうとうそひめが共寝をしたという事実は描かれておらず、読者にとっては唐突な表現と感じられる。一方、『朝顔の露』はその題名からも窺われるように、登場人物として「あさがほ」という固有名詞が用いられている。また、主人公露の宮がいなくなつた朝顔の姫君を探しているという物語の進行上、ここに「朝顔の面影」という表現が現れるのも全く不自然ではない。このことから、「朝顔の面影」は静嘉堂本の作者が考え出した表現というよりは、『朝顔の露』という作品の文脈から生まれた表現である可能性が高い。この表現からも、この道行文は本来は『朝顔の露』の所有する本文であり、静嘉堂本の作者がそれを利用したと考えられる。

静嘉堂本道行文において、道行き開始地点と終着地点に不自然さが見られる。まずは開始地点であるが、静嘉堂本道行文は「ねかはくはうそひめの御く衛しらせ給へと多かうして、せたのはしにそかゝりける」と始まる。ふくろうは加賀国にいたにも関わらず、道行文として実際に描かれているのは瀬田からであり、その間の旅路は省略されている。都から旅に出る際の道行文の出発地点としては、確かに瀬田の唐橋は定番の地名であるが、加賀国を舞台とする『ふくろふ』には内容上瀬田の唐橋はそぐわない。一方、『朝顔の露』は都を舞台としており、瀬田から道行文を始めることに何の違和感もない。

道行文の終着地点については、静嘉堂本は外の浜で終わっている。そして、うそひめの死が簡単に描かれた後、次に登場したふくろうはいきなり三河国へ移動して道行く人からうそひめの消息を聞くという本文になっている。外の浜は現在の青森県津軽半島にあたる場所であり、ここから三河国への道中の描写がないのも不自然である。『朝顔の露』道行文を見ると、その後越路に向かい、さらに「ではの国かめわり山」へと向かっている。静嘉堂本が『朝顔の露』を引用したのであれば、その先まで続けて引用するとふくろうが故郷あるいはそれに近い場所に帰ってしまうことになる。そこで、外の浜までしか引用しなかった結果、不自然になったと考えられる。

以上の二点からも、静嘉堂本文の作者が『朝顔の露』を引用したのはほぼ確実といつてよ(111)。

第一章では松本本が第一類本の中で最も古態に近い可能性を指摘した。したがって、松本本は寛永頃刊行の京大本よりも先の成立である可能性が高い。一方、第二章で示した通り静嘉堂本は『朝顔の露』を引用したと考えられるため、その成立は『朝顔の露』よりも後でなければならぬ。『朝顔の露』の現存伝本のほとんどが刊本であるということを見ると、おそらく典拠となった『朝顔の露』は刊本であろう。『朝顔の露』の最も早い刊本が寛永頃であるので、静嘉堂本の成立は寛永よりも後ということになる。これは静嘉堂本の奥書とも一致する。

以上より、静嘉堂本よりも松本本の方が先に成立していたと考えられる。即ち第一類と第二類では、第一類本文が先に成立していたということになる。

四 改作の意図

A系統第一類が最も古態に近い本文であるということを前提に、本章ではA系統第二類及びB系統がどのような意図を以て改作されたのかについて以下考察を述べる。

四一 A系統第二類静嘉堂本

静嘉堂本が第一類に付加した要素を以下に列挙する(112)。

⑤ ⑥ 山雀の小作が一度ふくろうの文遣いを拒否、ふくろう

の悲嘆に同情して文遣いを承詔

16 行方不明となつたうそひめを探してふくろうが諸国遍

歴

17 19 うそひめの病死と辞世の歌

まずはうそひめとの恋が成就するまでの前半部分に着目したい。特徴的な内容として、ふくろうが嘆き悲しむありさまと、それに同情する山雀の心中を描く表現が付け足されている。また、夜鷹の与七郎も「まことにうそひめの御ことはなさけふかき君とうけたまわる、御こゝろのうちをしはかり、かす／＼御いたはしく存候」とふくろうの心中を察する他、山雀も「まことに人しも多その中に、わたくしを御たのみあるへきとて、これまで／＼御いてかたしけなく存候」などと、まずふくろうの苦勞をねぎらう。さらに、うそひめと小作との關係を「うそひめも、小作殿には御こゝろをゆるさせ給ひ、したしく御はなしなされ候よしをうけたまわる」と詳しく説明する他、小作の説得に心変わりをするうそひめの様子を「さるほに、うそひめは御こゝろもゆゝしくならせられ」と描写するなど、うそひめについても描写の増加が見られる。ふくろうや小作、うそひめの心情についての表現が増えているとともに、よりふくろうに焦点を当て、ふくろうに対して同情的な文章となっていると言えるのではないだろうか。

後半部分でも同様の傾向が見られる。第二章で述べた『朝顔の露』からの引用部分である道行文が付け加えられる。第一類では上見ぬ鷲の討手によりあつげなく亡くなるうそひめであるが、静嘉堂本では討手からは生き延び、その過程で行方不明と

なつたうそひめを探してふくろうは諸国を尋ね歩く。このように一度は結ばれた姫君と別れ、その姫君を諸国遍歴して探すというのは、悲恋遁世型の王朝物語の典型的なストーリーである。その中で、うそひめが亡くなった原因についても、討手ではなく、「めされもならわぬたひのつかれ、またはふくろうをこひしゆかしとおほしめす、そのこひかせ」によるものとなっている。また、ふくろうはうそひめの墓にたどり着いた後、自害を試みることを木菟の与七郎に諭され、生きてうそひめの菩提を弔うことを決意するが、その説得の様子も第一類に比べてかなり詳しくなっている。

一方で、薬師への祈誓文の部分においては、表現が削減されている箇所が見られる。第一類では薬師への願掛けとして、成就した際に建立すると誓った宝殿の描写が為されているが、その描写全てが静嘉堂本には見られなくなっているのである。

これらを総合すると、第二類は第一類に比べて、ふくろうの恋愛に焦点が当てられていると言えよう。一般的に室町時代物語は、鎌倉時代までの王朝物語と比べると、心情の描写などといった表現が減り、話の筋を簡潔に述べる説話的文体に近いとされている。そのような傾向の中で、心情描写などをより細かに付け加えていることから、静嘉堂本の作者はふくろうの恋愛を主題とした、王朝物語風の作品を作り上げようとしたのではないだろうか。

さらに、文体の面でも細部に改変が見られる。第一類本と静嘉堂本を比較すると、しばしば「候」や「参らす」などの敬語表現が静嘉堂本に付加されているのである。全ての文末において敬語表現が付け加えられたものではないため確実ではない

が、これも王朝物語に近い、雅文を意識したためと考えることもできよう。また、『朝顔の露』から引用した道行文は『源氏物語』の和歌を引用するなど特に王朝物語風に作られており、『朝顔の露』の道行文を選んだという事実が王朝物語に近い文体を作り上げようとした意識の表れである可能性もある。

このように離ればなれになった恋人を探す室町時代物語は『伏屋』など一定数存在している。当時流行していた物語の型であったのだらう。ただし、そのような恋愛物では最終的に入内して栄華を極めるなど、姫君は幸福な人生を送るのが一般的であるのに対して、『ふくろふ』では、うそひめは亡くなり、二人が生きて再会することはない。このように、姫君も幸せになることなく亡くなってしまおうという内容は『朝顔の露』にも共通していえることである。このような別離を描く文学としては、同じく室町時代に流行した説経節がある。仏教理念である愛別離苦を説く説経節では、恋人や夫婦ではないが、親子の別離を描き、離別したことで仏教により深く帰依する様子を描く。静嘉堂本文の作者はこのような当時の流行をよりいつそう取り入れた形に改作したという可能性も指摘できよう。

なお、他作品からの引用方法として、ある一部分の語句や表現、和歌の利用あるいはそのモチーフ等の利用はよくあることであるが、静嘉堂本における道行文ほど長い直接引用は、ほとんど見られない。同じく室町時代物語である慶應義塾図書館蔵『しゆてん童子』が『うらしま』^(二四)の四季の庭の描写を引用する例くらいである。^(二四)この慶應義塾図書館蔵本『しゆてん童子』の引用も含め、道行文を一から作るのではなく、また表現を一部借りるのでもなく、そのまま借用したという部分に

も作者の何らかの意図が含まれているのかもしれない。

四二一 B系統東大本

B系統に属する伝本は東大本のみである。東大本は先行研究においてもA系統より後の成立であると見解が一致しているため、本稿ではその改作の意図のみ取り扱う。

はじめに、東大本の特徴として、A系統に比べて本文の分量が増大していることが挙げられる。増大している部分において特に目を引くものとしては、(3)諸鳥の和歌、(10)中国故事の引用、(11)ふくろふの諸国遍歴、(16)小歌の引用に加えて、随所における美人描写などの比喻表現がある。これらが示すものについて、廣田氏^(二五)は「本作が教訓、たしなみ、作法などを示すために作った物語であるということを裏付けするものであるとする。これら東大本の増大部分はそのほとんどが挿入説話的な性格をもつものばかりであり、物語の内容として独自の要素をもつわけではない。たとえば、非常に大きな分量を占めるふくろふの諸国遍歴の場面であっても、静嘉堂本の場合ほうそひめを探しに行くという独自の要素であると見なせるが、東大本の場合はその理由がうそひめから返事がもらえないために、物詣をすることが目的であり、道中で米山薬師に祈願している。したがって、物語の要素としては、A系統における薬師への祈願(⑦・⑨)と同等のものが増大と考えられるのである。すなわち、東大本作者による改作は、静嘉堂本作者による改作とは異なり、内容面での改作を試みたものではないことが明らかである。

五 おわりに

以上、『ふくろふ』諸本の成立について考察を試みてきた。本稿では本文研究の面から松本独自文を考察した結果、松本本が古態に近い可能性が高いこと、他作品との関連の面から静嘉堂本が『朝顔の露』の道行文を引用していることを指摘した。その結果、二系統三種類に分けた七本のうち、最も多くの伝本が属するA系統第一類が古態に近い可能性が高いという結論に至った。

また、その成立関係をもとに、室町時代物語の改作の意図についても考察を行った。親本をそのまま書写するのではなく、わざわざ改作しているということは、何かしらの作者の創作意図があるはずである。その改作の方法には大きく分けて縮小と拡大の二通りが存在するが、本稿では拡大する際の方法として、物語の内容そのものに改作を加える型と、物語の筋書きはそのままに、挿入説話といった滞留部分のみの拡大を行う型の二種類を見た。本稿で考察した限りにおいて、物語の内容そのものに改作を加える方が改作の意図は掴みやすいように思われる。ただし、本考察と同様の改作が他の室町時代物語の改作においても行われていたかどうかは分かっていない。

これら二種類の改作がほぼ同時期に行われていたということは興味深い現象であるが、今後どのような時期にどのような改作が行われていたのかということ調べることによって、室町時代物語の発展の歴史をつかむことができよう。本稿では『ふくろふ』一作品の考察に留まったが、他作品においても同様の傾向、あるいはまた別の傾向が見られるのか、課題としたい。

[注]

(一)『ふくろふ』と他作品との影響関係の指摘については、以下のような論文がある。

・石川透『『ふくろふのさうし』の成立』、『三田國文』第十号、昭和六十三年十二月

・徳江元正「奈良絵本『ふくろふ』——國學院大學図書館蔵善本解題IV——」、『國學院大學図書館紀要』第四号、平成四年三月

・廣田哲通『『ふくろふ』のおもしろさ——中世人の知識・教養について考える——』、『女子大文学』国文篇第五十二号、平成十三年三月

(二)ただし、國學院本については解題(注「徳江元正「奈良絵本『ふくろふ』——國學院大學図書館蔵善本解題IV——」における松本本の本文校異表のみの参照である。

(三)それぞれの伝本の翻刻を参照した文献は以下の通りである。本稿において本文を引用する際には全て以下の文献から引用する。

・松本本・東大本：横山重・松本隆信編『室町時代物語大成(第十一)』角川書店、昭和五十八年

・静嘉堂本：同『室町時代物語大成(第二)』角川書店、昭和四十九年

・京大本：京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵むろまちものがたり9』臨川書店、平成十五年

・天理本：石川透「天理大学附属図書館蔵『ふくろふのさうし』解題・翻刻」、『三田國文』第九号、昭和六十三年六月

・刈谷本：国会図書館本については、それぞれの図書館より複写をいただいた。本文を引用する際にはそれらを私に翻刻した

ものを用いる。

なお、本文の引用にあたって読みやすさの観点から、一部句読点を私に改めた。

- (四) なお、日本古典籍総合目録データベースにはこれらに加えて「写栗田(二冊)」を載せるが、これについては未見である。松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(奈良絵本国際研究会議編『御伽草子の世界』三省堂、昭和五十七年)や中島貴奈『ふくらう』解題(注三『京都大学蔵むらちものがたり』9)解題)も、個人蔵(江戸初)・奈良絵本(個人蔵本)を挙げるがいずれも未見としており、詳細は不明である。なお、「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」及び先行研究のいずれにおいても国会図書館本に言及したものはないが、国会図書館本は合冊であることから、個人蔵本とは異なる伝本であると考えられる。したがって、『ふくらう』伝本としては計九本が存在することになる。
- (五) 独自の内容として、ふくらうの住む場所が近江国であること、ふくらうに名前がついていること、恋の相手が五位の少将でうそひめの名がないこと、少将が懐妊し子ふくらうが生まれることなどが挙げられる。
- (六) ふくらうの官位が「むくの介」であるという点のみ東大本と一致する。
- (七) 別本扱いとはいえず、『ふくらう』伝本として挙げるのは、作品名及び物語の土台となる「ふくらうの恋物語であること」、「仲介者を通して恋愛を成就させること」、「薬師が物語の展開上大きな役割を担っていること」という三つの内容は一致しているからである。

(八) 廣田氏は松本本について、「静嘉堂文庫本と同系統の本文であ

る」と述べる(注一『ふくらう』のおもしろさ)。その他注一に挙げた論文ではいずれもそれぞれの伝本について系統を分けることなく比較している。塚本光子氏は静嘉堂本・松本本・東大本について「原本を同じくするものだが、それぞれ別系統で伝わって来たものであるように考えられる」とする(『中世小説』「うそひめ」についての研究―鳥の描かれ方を中心に―)、『長崎大学古典文学研究』七巻、平成十一年十二月)が、本稿でA系統第一類とした松本本以外の伝本には触れていない。また、いずれの論文においても東大本が最も新しいとすることは一致している。

- (九) 廣田氏は静嘉堂本について「オーソドックスな私たち、すなわち現存伝本の中では原態を残すもの」とし、「静嘉堂文庫本、松本本をやはり一番もとのかたちとし、京大本も静嘉堂文庫本・松本本と相補うかたちで大筋同系統の本文と考えるのが妥当と考えられる」と述べる(注一『ふくらう』のおもしろさ)。また塚本氏は後半の内容が簡素になっていくことから、静嘉堂本を原本に最も近い本文であるとし、次いで松本本、東大本の順に成立したと述べる(注八『中世小説』「うそひめ」についての研究)。
- (十) 注四『ふくらう』解題
- (十一) 刈谷本について、廣田氏の論文(注一『ふくらう』のおもしろさ)に「書写年次が明治一四年でその本文の来歴も不明である」と少し説明があるのみである。
- (十二) 注四『ふくらう』解題

(十三) 京都大学文学部国語学国文学研究室編『京都大学蔵むらちものがたり』8(臨川書店、平成十一年)

(十四) 新編日本古典文学全集 63 『室町物語草子集』(小学館、平成十四年)

(十五) 新編日本古典文学全集 58 『謡曲集①』(小学館、平成九年)

(十六) 以下『朝顔の露』本文の引用は次の翻刻による。

横山重・太田武夫校訂『室町時代物語集』(第三) 大岡山書店、昭和十四年)

(十七) 道行文の全文は〈資料 道行文対照表〉参照

(十八) 市古貞次氏は異類小説をさらに(一) 怪婚談(二) 純粋な異

類物(イ) 歌合物(ロ) 恋愛物(ハ) 戦記物(ニ) 遁世物(ホ)

その他の二種六類に分類する。『中世小説の研究』東京大学出版会、昭和三十年)

(十九) 伊知地鉄男氏による鑑定。(横山重『書物捜索下』角川書店、昭和五十年)

(二十) 『朝顔の露』の伝本は以下の通りである。(松本隆信『擬古物

語系統の室町時代物語―「伏屋」「岩屋」「一本菊」外―)『斯道文庫論集』第五号、昭和四十二年七月)

(イ) 横山重氏蔵絵入写本 一帖

〔寛永〕刊絵入本(横山重氏・天理図書館蔵)

同覆刻本(国会図書館蔵)

明暦四年山田市郎兵衛刊絵入本(果園文庫旧)

延宝八年万屋床兵衛刊絵入本(天理図書館蔵)

国会図書館蔵(江戸前期)写本

(ロ) 万治二年松会刊絵入本(横山重氏蔵)

寛文四年山本旧左衛門刊絵入本(東北大学図書館蔵)

〔寛文〕松会刊絵入本(岩瀬文庫蔵)

刈谷図書館蔵(元文二年写本)

(ハ) 正徳五年近江屋九兵衛刊絵入本

(東洋文庫・大東急記念文庫・竜門文庫等蔵)

同鶴屋喜右衛門刊本(岩瀬文庫蔵)

(ニ) 京都大学国文学研究室蔵天保六年写本

(二十二) 柴田芳成氏はうそひめの謎言葉が『朝顔の露』の朝顔の謎

言葉とも共通の趣向を持っていると指摘する(『フクロウの書いたラブレター―お伽草子の恋文―』『日本語・日本文化』四十卷、平成二十六年三月)が、そのほかに物語の流れも『ふ

くろふ』と『朝顔の露』は共通した部分があり、静嘉堂本本文の作者が『朝顔の露』道行文を引用したのもその共通性を見出したからかもしれない。

(二十一) 行頭の番号は表一の番号と対応する。

(二十二) 『うらしま』の伝本は大きく以下の四系統に分けられる(徳

田和夫編『お伽草子事典』東京堂出版、平成十四年)が、そのうち最も伝本が多く、流布本とされる第四系統に『しゅてん童子』と共通する四季の庭表現が見られる。

(一) 絵巻一卷(日本民芸館蔵)、写本一冊(高安六郎旧蔵)、

絵巻一卷(フランス国立図書館蔵)

(二) 絵巻一卷(日本民芸館蔵)

(三) 絵巻一卷(古梓堂文庫旧蔵)

(四) 御伽文庫他

(二十四) 佐竹昭広『酒吞童子異聞』平凡社、昭和五十二年

(二十五) 注一廣田哲通『『ふくろふ』のおもしろい』

(あらしき のぞみ・滝川第二高等学校教師)

※波線部は異同を、■は片方のみに見られる語を表す。

静嘉堂本

やふれころもすみにそめ、せうこをくひにうちかけて、南無阿弥陀佛、みたによらい、ねかはくは、うそひめの御ゆく衛しらせ給へとゑかうして、せたのはしにそかゝりける

のし、しの原をすきゆけは、なみたにくもるかゝみ山、それよりいせ路にをもむき、すゝかの山にさしかゝり、これなんいにしへ、みやすところ、此國へ下り給ふとき、源氏の大將、名残の哥に

ふりすてゝ今日はゆくとも鈴河（鹿）かわやせせのなみに袖はぬれしや

とよみをくり給へは、みやす所御返哥に

すゝか川やせせのなみにぬれ／＼ていせまてたれかをもひをこさん

とたかひにつらね給ふも、この所のことそかしとうちこへさせ給ひ、それよりいそちにさしかゝり、かのなりひらの中将

いとゝしくすきにしかたのこひしきにうらやましくもかへるなみかな

となかめたまひしうらをすきゆき、いつかうき身はおわりの國、あつたの宮をふしおかみ、みかわの國にいりぬれは、やつはしのかきつはた、くもてに物を思ひつゝけて、うちとをらせ給ふほとに、たつぬるひめをとう／＼み、さよのなか山にしはしやすらひ、むかし、さたうひやうへのりきよも、わかことくこひ

『朝顔の露』

かくてそのよもあけぬれは、せたのからはしうちわたり、のし、しのはらをすきゆけは、なみたにくもるかかみ山、それよりいせちにおもむき、すゝかの山にさしかゝり、これなんいにしへ、みやす所、このくにへくたり給ひしとき、けんしの大しやうのなこりのうたに

ふりすてゝけふはゆくともすゝかはやせせのなみにそてはぬれしや

とよみをくり給へは、みやす所御返か

すゝかゝはやせせのなみにぬれ／＼ていせまてたれかおもひをこさん

とたかひにつらね給ふも、この所の事そかしとうちこへさせ給ひ、それよりいそちにさしかゝり、かのなりひらの中将

いとゝしくすきにしかたのこひしきにうらやましくもかへるなみかな

となかめ給ひしうらをすき、いつかうき身はおはりのくに、あつたのみやをふしおかみ、みかはのくにゝいりぬれは、やつはしのかきつはた、くもてにものをおもひつゝけて、うちとをらせ給ふほとに、たつぬる人をとをたうみ、さよの中山にしはしやすらひ、むかし、さとうひやうへのりきよも、わかことくこ

のみちにしゆきやうにいて、この山にきたり

としをへてまたこゆへきとをもひきやいのちなりけりさよの
中山

と侍るも、いまみるやうにおほへたり

物うきたひをするかなる、みほのまつはら、きよみかせき、う
きしまか原、たこの浦、あしたかやまのふもとより、ふしのた
かねをなかむれば、はるゝかたなきこひのけむり、人のうへと
もおもわれず、いとゝなみたはいづの國、君をみしまとふしお
かみ、はこねの山のこけむしろ、しはしうきねのまほろしに、
君のすかたもたちそいて、夢枕つゝみしか、よのはやあけぬれ
は、あさかほのありしおもかけはきへうせて、たゝ徒に水の付
きをのそむさることくにて、たゝほうせんとあきれはて、か
くなん

君をのみせめてゆめにもみる物をあけてそつらきはこね山か
な

とうちすさみ給ひて、さかみの國にきこへたる、きく川のしゆ
く、かまくら山をたつねたまへと、ゆきかたなし、いにしへの、
なりひらの、物のふをうらみしむさしのをすき、すみた川につ
き給ふ、けに是もまめおとこ、みやこ鳥に事とひしめいしよな
りと、うちこへさせたまい、ひたち、しもをさ、かい、しなの、
残らずたつね、それよりも、君にはいつかあふしうまで、はる
ゝきぬるたひころも、やつれはてたるわかすかた、いつくの
つちかわれをまつしま、おしまのとまや、ひらいつみ、つかる
をすきて、そとのはま、まことやこの所には、うとふの鳥の子

ひのみちにてしゆきやうにいて、このやまにきたり

としをへてまたこゆへしとおもひきやいのちなりけりさよの
中やま

と侍るも、今みるやうにおほえたり

〔挿絵 第十回〕

ものうきたひをするかなる、みをのまつはら、きよみかせき、
うきしまかはら、たこのうら、あしたか山のふもとより、ふし
のたかねをなかむれば、はるゝかたなきこひのけむりの、人の
うへとおもはれず、いとゝなみたはいづのくに、君をみしま
とふしおかみ、はこねの山のこけむしろ、しはしうきねのまほ
ろしに、君のすかたのたちそひて、ゆめまくらつゝみしか、よ
のはやあけぬれば、あさかほのありしおもかけはきへうせて、
たゝいたつらにみつの月をのそめるさることくにて、ひきと
ゝむへきたよりもなく、たゝほうせんとあきれはて、かくなん
きみをのみせめてゆめにも見るものをあけてそつらきはこね
あまかな

とうちすさみ給ひ、さかみのくにゝきこへたる、きくかはのし
ゆく、かまくらやま、たつね給へと、ゆきかたなし、いにしへの
のなりひらの、ものゝふをうらみしむさしのをすき、すみた河
につき給ふ
けにこれもまめおとこ、みやことりにととひしめいしよなり
と、うちこゑさせ給ひ、ひたち、しもをさ、かい、しなの、の
こらすたつね、それよりも、君にはいつかあふしうまで、はる
ゝきぬるたひころも、やつれはてたるわかすかた、いつくの
つちかわれをまつしま、をしまのとまや、ひらいつみ、つかる

ゆへにちのなみたをなかつときこへしか、われはまたつまゆへ
そと、みきくにもろきわか^かなみた、袖のかはけるひまもなし
さるほとに、わかふるさとをたちいて、はやふたとせになり
にけり

をすきて、そとはま、まことやこのところには、うどうの鳥
の子ゆへにちのなみたをなかつときこへしか、われはまたつま
ゆへそと、見きくにもろき御^みなみたに、そてのかはけるひまも
なし

それよりこしちのかたへおもむかんと、夜をこめててはのくに、
かめはり山をこへすき、…